

2月には花粉症に悩む多くの方にとって、つらい季節の始まりです。今回は花粉症に用いる漢方薬についてご紹介します。その前にまず、花粉症の漢方医学の見方と特徴を簡単に説明します。

- 1) 気血水理論のなかでは水滯と考えて治療する。
- 2) 花粉の飛散する時期は対症療法主体、飛散しない時期は漢方医学的な体質改善を目指した治療を行う。
- 3) 西洋医薬と異なり、眠気などの副作用が出にくい（専門的には脳内のヒスタミン H1 受容体に影響しない）。

1については、花粉症の水様の鼻汁や目のかゆみ・流涙といった症状が、漢方医学的に水滯つまり水分バランスの異常と解釈されるわけです。2の体質改善について、具体的には例えば肥満傾向の方は症状が強くなることが多いため、肥満を改善する漢方薬で治療するなどです。3が臨床的には一番のお勧めポイントで、麻黄の覚醒作用も手伝って受験生や車の運転をする職業の方などに喜ばれます。もちろん抗アレルギー薬との併用も OK です。ただ逆に言えば、抗アレルギー薬を睡眠薬代わりを兼ねて使っているような人には向かないかもしれません。

花粉症の代表的治療薬といえば、やはり小青竜湯でしょう。気管支や肺の水滯を治療する治療薬ですので、水様性の痰や鼻汁、くしゃみ、咳嗽に対応します。アレルギー性鼻炎の他、気管支喘息や風邪にも用いられます。麻黄を含むため若年者向きとなります。私も花粉飛散のピーク時には外来診療の前に服用しますが、体が温まる感じとともに鼻水やくしゃみが治まるので助かっています。

もちろん花粉症に使える漢方薬は小青竜湯だけではありません。いくつかご紹介すると次のようなものがあります。

- 麻黄附子細辛湯・・・寒がりの人や高齢者向きで温める作用が強いです。花粉症だけでなく冷え症にも。寒い朝が苦手な女性の患者さんにはベッドの中で服用していただいています。そうすると元気に起きられます。
- 苓甘姜味辛夏仁湯（りょうかんきょうみしんげにんとう）・・・小青竜湯と同じく肺の水滯に対応しますが、麻黄を含まないため麻黄を使いづらい患者さん、高齢の患者さん向きです。漢方を専門でやっている人は小青竜湯の“裏処方”などと呼んでいます。
- 当帰芍薬散・・・五苓散の構成生薬を含むため、冷え症やむくみなどを目標に花粉症用としても用いられます。
- 越婢加朮湯・・・これも水滯に対応する漢方薬で、特に結膜炎合併時に頻用します。とてもよく効きますが麻黄が多い点に注意が必要で、小青竜湯などと同様若年者に向いています。

花粉症に対しても、漢方薬は西洋医薬にない効果・持ち味があります。これまで漢方薬を使ったことのない方、西洋医薬だけでは効果が十分でない方は、この機会にぜひお試しください。